

大正期における

別府の観光振興をめぐる

織田直文

はじめに

日本は明治以降、一国の近代化とともに地方の地域振興を図ってきた。しかしながら明治の十年代までは、近代国家としての政治・行政システムの整備が主たる課題であり、地方の振興は思うようにうまくいかなかった。例えば天皇東遷後衰退著しい京都市の再生策は芳しくなく、宮城県の野蒜港のように、事業半ばにして中止された例もあった。やがて明治二十年代になると鉄道による交通ネットワークや港湾整備が進み、あるいは個別のプロジェクトでも例えば京都市での「琵琶湖疏水開発」（明治一八年〜二三年）が成功を収め、脚光を浴びた²⁾。

港湾、鉄道、灌漑用水、運河などのいわゆる土木的なハード整備が行き届くと、明治末から大正・昭和初期に至るとそれらのインフラを活かす地域振興、例えば観光振興（大正期

の観光ブーム）などが生まれてくる³⁾。筆者はその典型が大分県別府（時代とともに別府の「町域」「市域」は変化する）、本稿では「別府」とする）であった。

近代の別府の発展については、既に浦達雄が、本誌第十九号の論説で以下のように述べている。

近代における別府の発展には一八七一年（明治四）年の別府港の築港とそれに伴う瀬戸内航路の開設、一九〇〇（明治三三）年の別大電車、一九一一年（明治四四）年の別府駅開業など、交通近代化の影響が計りしれない。また上総掘りによる温泉の人工掘削、立身出世型の人材の流入、観光施設の開発、日清、日露戦争後の好景気など様々な理由で、明治期から大正期にかけて別府八湯の旅館数は拡大したと推定できよう⁴⁾。

本稿は右記の指摘のうち、とくに都市の物的（ハード）整備と、立身出世型の人材の流入すなわち油屋熊八（以下「熊八」とする）らのことをさすが、とくに別府の宣伝やイメージ形成に大きく貢献したと言われる熊八の人物像の整理を試みようというものである。

一 資料の状況

大正期における別府の地域振興に関して述べるにあたり、参考とすべき文献を調べたところ、表一のようなものが確認できた。もちろん、これらはまだ全体の一部にすぎず、今後さらに拡充していく予定である。なお、これらの文献を大別すれば以下のようなになる。

第一が、歴史・史実としての別府発展の経過を記述したもので、例えば町史(誌)・市史(誌)をはじめ、是永勉の『別府今昔』や堀藤吉郎・志多摩一夫の『目で見る別府百年』、安部巖の『ふるさとの想い出 写真集 明治・大正・昭和・別府』などがこれにあたる。なお、町・市史(誌)は過去六回発行されており、大正三年に出された『別府町史』が最も古く、最も新しいものが、平成十五年に発行された『別府市誌』で、これは現在でも市役所で購入することができる。

第二が、別府観光振興に貢献した様々な人物に関する資料である。その中の中心人物が熊八なのである。ただし、熊八本人が遺した日記や資料は意外と少なく、また宇都宮則綱のように自伝を遺した人物もいるにはいるが、関連する人物については、全体的に資料が乏しく、詳しく分からない状況にあると言つてよい。

その中で、大分県立図書館や別府市立図書館などに所蔵されている関連資料が重要である。例えば、兼子鎮雄が昭和二七年にガリ版刷りで作成した「観光別府の先覚者 油屋熊八」(別府市立図書館蔵)は、熊八の経歴、年表、性格、人物評価など、かなり詳しく述べてある。そこには熊八と同時代を生きた人間の証言としての記録の価値を見出したい。宇都宮の自伝『回顧七十年』は後の様々な文献にかなり引用されており、梅田凡平(幼名、卯太一郎)についても別府市立図書館や親族所蔵資料があつて、参考にされているが、原北陽(本名「熊太郎」)については詳しくわからない。さらに、熊八の人生に大きく関わった妻のユキや亀井アイなどについては、今回の調査で論ずるに足る十分な資料は得られなかった。

第三が、以上のような資料や、独自の調査をもとに書かれた著作である。昭和四年の志多摩一夫『別府開発の偉人 油屋熊八』(以下、本稿では「著者名の後に「・本」を付けて表記する)をかききりに、以後村上秀夫(昭和五九年、平成十年)、佐賀忠男(昭和五九年)、岩藤みのる(平成十一年)等は、熊八や周辺の人物を含めてできるだけ史実に則り、しかし基本的には読み物として著した秀作である。

いずれも読み物としての完成度を高めるため、一部にフィ

クシヨンが混ざっているようであるが、志多摩本と村上本は当時の写真が多く掲載されていること、村上の第二作には、熊八直筆の文書の転記を試みているなどで、史料価値はある。西日本新聞社に昭和六十年五月二四日から八四回連載されたという佐賀忠男の「湯けむり太平記・油屋熊八物語」、あるいは、熊八の人生の全容とその周辺人物らの活躍をドラマチックに描いた岩藤の『甦れ!!熊八たち』は、いずれも読み物として完成度の高い作品で、全体像を掴むには最も優れた作品として評価できる。なお、佐和みずえの『別府 華ホテル 観光王と娘の夢』（平成十八年）は、著者自らも語っているように、まったくのフィクションとして読むべきものである。

第四が、別府観光や熊八等のことについて紹介する雑誌、新聞記事、パンフレット等である。それらも古い物は、史料価値が出てくる。例えば、本誌第十九号で、「別府八湯ものがたり」と題し、別府の歴史紹介をしている平野芳弘、あるいは小野弘などは、相当の期間をかけて、それらを収集、保管しているようである。近年のものは、別府の魅力を知らせる広報的意味合いで様々なものが発刊されている。それらの中でとくに「BAHAN」第十号の『油屋熊八と別府』

（平成四年）や別府市観光協会が出した『地獄のある都市 油屋熊八と別府観光・地獄巡り』（平成十四年）は秀作である。また、ユニークな記録として、吉永カメラ店（吉永秀生）が、彼の先代が約五十年前の別府を八ミリ映写機で記録したドキュメンタリーをDVDに焼き付け、現在も見られるようにしているが、これは極めて貴重な映像記録であり、今後は学術的価値が増すと思われる。

第五に、近代化過程における大正、昭和期の研究においては、当時を直接知る、あるいは一代前の人々から話を聞き、記憶している人物への聞き取り、すなわち「証言」を聞き取るという作業が大事である。今回も可能な範囲で実施したが、この作業はまだ始まったばかりと考えている。そして、近いうちに日本最初の観光バスガイド（亀の井バス）と言われ、生前の熊八を知る村上アヤメさんへのインタビューを実現したいと考えている。

二 科学的な研究アプローチへ

近年は別府の近代化過程や発展経過、熊八や彼に関わった人物についてももう少し科学的に分析し、歴史研究を深めようとする動きが出てきている。後世に生きる人々が歴史から正

しく学ぶには、史実を確認し、科学的な歴史研究を積み重ねることは重要なことである。その取組は、時には通説を否定するような内容になる場合もありうる。例えば、平成一五年六月二十一日号の大分合同新聞では、「温泉マーク」の熊八考案説が否定される記事が掲載されており、近年では熊八の実像の全容解明を試みた三重野論文（平成一六年。表一の記号 i）、あるいは熊八の伝説性に疑問を抱き、彼の業績の再検討を試みた堀田穰論文（同 f, g, k）なども出てきている。

堀田は、児童文化論・図書館情報学を専門とするが、「油屋熊八の実像を探る」（『別府史談』第一八号）では、梅田凡平らのお伽俱樂部活動を、当時の全国的な動きや瀬戸内海を結ぶネットワーク展開の中から分析を試み、「油屋熊八伝説を疑う」（『人間文化研究第九号』）では、別府お伽俱樂部の功績は、熊八にあるのではなく、当時全国的な動きであったお伽俱樂部活動の瀬戸内海版（瀬戸内海コードモ連盟）が活発化し、別府が瀬戸内海の拠点化していたこと、また「子ども」が新たな観光のテーマになりつつあったことにあると述べ、これまで言われてきたような熊八の個人的な業績との見方を否定している。さらに、「油屋熊八伝説の生成」（『人間文化研究第十号』）では、『日本新八景』の選定における熊八の活

躍、さらにはお伽俱樂部での活躍に触れているが、後者の部分は専ら梅田凡平の活躍が主であり、梅田の関西等での人脈が別府観光の振興に貢献したとしている。

あるいは、熊八の最大の功績は別府の宣伝にあるが、それは民間人としての活躍であり、行政も当然精力的に行っていたことであり、筆者はむしろ官民共同での宣伝戦略の展開こそが功を奏したと考えている。志多摩本では、熊八が来る前段階の明治三十九年時点で、別府、浜脇両町の合併を記念し、別府町長の日名子太郎が大坂方面に出かけ、別府温泉を宣伝したこと、さらには、新聞記者や作家を招き、別府宣伝を仕掛けたことが書かれており、別府町誌にも「別府宣伝は、既に明治後期から始められているが、中央の大新聞の記者を招いて、その別府紀行文を新聞に連載してもらったり、油屋熊八らの先覚者たちが私利を離れて別府宣伝に大きな成果をあげたのである。」と書かれている。

すなわち、熊八が別府に来る明治末頃には、日名子太郎は既にしたたかに別府宣伝の手を打ち始めていた訳で、そうした面も含めたソフト戦略の分析が必要である。日名子太郎は後の四節で述べるように、都市計画事業の推進というハード事業と、ここで言う宣伝というソフト戦略をともに意識した

都市政策を進めていたようで、この人物の別府振興に果たした功績は非常に大きいと考える。筆者は日名子太郎の研究を、今後さらに進めたいと考えている。

三 大正期の別府繁栄の概況

別府は、日本一の湯量と質を誇る、日本を代表する温泉地である。平成一九年度の市発行の観光動態要覧によれば、源泉数（孔）は二、八三二で、一分間の湧出量は毎分九五、一九〇リットル、泉質は地球上の十一種類中十種類が存在し、これらの数字はいずれも日本一とある。しかしながら、江戸時代まではあまり全国的に知られていたとはいえず、一地方の温泉地にすぎなかった。それが注目されるようになったのは、明治期に入ってからであり、それも明治も三十年代以降のことである。明治期に日本に滞在し、草津温泉を研究し、それを世界に知らしめたドイツ人のエルビーン・フォン・ベルツ博士が、明治三二（一八九九）年に別府を訪れた際に述べた次のような言葉は、当時の別府をめぐりに言い当てる。なお、博士は、東京帝大の教え子、鳥瀧恒吉（明治三十一年に創設された朝見病院創立者）の招きで来別し、鳥瀧と日名子太郎が案内役を務めたが、博士は別府のことを

「東洋のナポリ」と絶賛したとも言い伝えられている。

このような「清秀閑雅」な温泉地は、世界各国のうちでも、ほとんど例をみない。温泉地はいたる所にあるが、山海の景勝を兼ね備えた所は非常に少ない。熱海は境域が狭く、別府の雛形のようなものである。「別府は実に熱海の大なるものなり」と、激賞した。しかし、残念なことに、交通機関が不充分であることや、温泉地としての「諸般の設備」が未整備である点などを指摘した。例えば、公園・海水浴場が「一カ所も無いことは「甚だ遺憾である」と述べている（大正三年版『別府町史』⁶⁾。

つまり、この頃の別府は、風光明媚な魅力的な地ではあったが、とてもその後の華やかな温泉観光地とはほど遠い状況だったのである。

明治末年から昭和初期にかけての観光動向をみると、正確に把握することは難しい面があるが、別府市誌によると、「明治十三年ごろ、別府を訪れた入湯客は年間わずか二万人であったが、四十年には四〇万人を超え、鉄道開通の四十四年には、五〇万人を超え⁷⁾、あるいは「日露戦争を境に入湯者は飛躍的に増大、三九年度三九万五、三〇三人から四四年度には五四万五、〇〇九人（宿泊者数）となった」とある。明

治十三年から四十年の間の二七年間に約二〇倍、明治末年の五年間でも実数で十四万九、七〇六人、割合でいくと三七・八パーセントの増加を示したのである。

これらが需要だとすれば、供給面の宿泊施設の方はどうであったかといえ、別府市誌（二〇〇五年版）には、明治三五（一九〇二）年の別府町では名前が分かる十軒のほかに数十軒の旅館があったこと、また亀川にも二十軒ほどの宿屋があったことが書かれている。それが、「明治四三年になると別府町の宿屋は一七五軒にのぼった（『市勢要覧』）」⁹⁾とあり、「大正元年（一九一二）」には二〇二軒となる。昭和八年（一九三三）には二九六軒を数え、亀川町、朝日村、石垣村が合併した十年には四〇二軒となった。¹⁰⁾とあるから、こちらでも急成長であった。

浦論文（二〇〇六）では、大正九年（一九二〇）の旅館業総数は二一五軒としているが、年代別の旅館業の創業数推移が示されている。それによれば、江戸期は一軒、明治十年代はゼロで、二十年代が二五軒、三十年代が四七軒、四十年代は四十軒、大正期は一〇二軒で、明治三十年以降大正期にかけて急増したことが明らかである¹¹⁾。

需要と供給のいずれの点でも、当時の全国の動きが分から

ないので、相対的な評価はできないが、別府が明治末から大正期にかけて温泉観光地として飛躍的に発展したことは間違いない。

四 国土の交通ネットワーク整備と別府の都市計画事業

それでは、なぜこの時期、別府はかくも急成長を遂げたのであろうか。本稿では、地域開発の成否のうち、道路・交通基盤整備、都市計画事業などのハード面と観光宣伝やイメージ形成といったソフト面の二面から検証してみる。まず、ハード面から見てみよう。

我が国の産業革命がなったといわれる大正三年の鉱工業生産力を一〇〇とすると、明治元年は〇・三、明治十五年は七・五、明治二十年九・六、二五年に一四・二、三十年に二九・八、四十年に六六・三ということ、つまり明治二十年代から明治末にかけて急激に伸びていることが分かる。この間、国土や地方の地域整備も進んでいき、鉄道は明治二十年までの総延長は九五六キロメートルであったが、その十年後の明治三十年には四、八四三キロメートルまで延伸し¹²⁾、明治期にはほぼ今日の鉄道ネットワークが完成している。港湾整備も明治後期に着工されたものが多く、土木技術面でも機械化

が進み、トンネル延長や橋梁スパンなども飛躍的に伸びてきている。

こうした生産力の増大に伴う国富の増大や交通ネットワークの形成は、当然の帰結として国民の移動を促し、一種の観光ブームが起ったのである。

別府もこの流れに乗り遅れることなく、様々な社会資本整備を進めるのであり、これが別府発展に大きく寄与するのである。

まずは鉄道や港湾整備である。ベルツ博士の発言があった翌年の明治三三（一九〇〇）年五月に、地域が限定はされていたものの「別大電車」が開業した。別府市誌第一巻には、「日本最初の路面電車は京都市の二八年であったから、地方としては最も早い時期であり、全国では六番目、九州では最初であった。」¹³⁾とあるから交通整備にはかなり積極的な姿勢があつたと言える。このように早い時期に電車が走った背景には「火力発電所の稼動が東京に次いで全国二番目で、明治三十三年三月に稼動していたからである。」と外山健一は指摘する。残念ながら全国ネットワークに通じる鉄道整備は、明治四十年代に入ってから、ようやく開通ということで、こちらの方は決して早かつたとは言いが、それでも三重野

は、「明治四四年には日豊線小倉―大分間が開通、四五年（大正元年）には、大阪商船の別府・大阪専用航路も開かれ（隔日出帆）、別府は浮揚期を迎えつつあつた。」¹⁴⁾と述べており、交通基盤整備がほぼ明治期に整い、このことにより別府の大正期の飛躍が担保されたと言つてよいであろう。

さらに、筆者がもう一つ注目したいのが、大正期に精力的に取り組まれた「市区改正」に基づく道路整備や耕地整理、上水道の整備などの、つまり今日言うところの「都市計画」事業の推進である。俄かに温泉観光地として注目され、観光客が急増し、宿泊施設も増加し、人口も伸びていったのであるが、元々の農山漁村から無秩序に街が造られつつあることは、別府発展にとつては弊害になると考えた当時の為政者（日名子太郎や吉田嘉一郎）らは、明治四十二年に「市区改正規程」を町会で可決させると、主要幹線道路の整備を明治四十四年に完成させ、その後の大正期には次々と耕地整理を進めていった。さらに、海岸地での埋め立て工事が進み、昭和三、四年には、ほぼ事業を完成している¹⁵⁾。

同時期、明治三八年の日名子太郎の提案から十二年後の大正六年四月一日には、上水道の整備も完了している（全国で三七番目）が、県都の大分市の上水道完工が昭和二年七月と

いう⁶⁾から、別府の取組がいかに早いか分かる。

こうして日本の地方において稀に見る速さで、別府の都市計画全般が仕上がっていったのである。別府市誌第一巻(二〇〇五)の二二六頁には、昭和三年刊の『別府市勢要覧』から「別府市街図」を転載しているが、基盤の目的のみごとなまでの都市計画が仕上がっている。同文献は、市区改正の取組を「大正八年の都市計画法公布にさきがけた、先見性のある近代化政策であった。」⁷⁾と評価している。次節では、別府の観光振興において民間人として活躍した熊八の人物評を述べるが、筆者は、むしろ日名子らのこの都市計画事業の取組こそ、大正期の別府の温泉観光地としての飛躍の最大要因だったと考えている。

五 油屋熊八の人物像と魅力

筆者は、地域振興を図るには、港湾、道路、鉄道などの交通基盤や都市計画事業といった物的(ハード)整備とともに教育文化振興や産業振興、地域イメージ形成といった非物的(ソフト)事業の展開が必要であると考えている。前述のとおり、大正期の別府のハード整備は全国に先駆けて行われ、高く評価されるが、それだけでは他に抜きんできた優位性を確

保することはできない。地域振興のためのソフト事業をプロデュースすることが必要なのである。ちょうどその時に登場してきたのが、油屋熊八であったのである。

熊八が別府に来て亀の井旅館を創業したのが明治四十四年十月一日であることから、どうやら、熊八はこうした別府の動向を睨んで、タイミングよく別府での旅館業を企てたのではないのか、というのが三重野や筆者の見方である。ただし、熊八がそのように考えて別府に來たということを実証する裏付けは残念ながら無い。

ところで熊八に関する文献は多いが、必ずしも学術的かつ



油屋熊八の生誕地(右側中央、タクシーの後ろの店付近)〈筆者撮影〉

体系的に研究されているとは言えない。本人が残した日記や資料は少なく、彼の人生全てをつまびらかにするには至っていない。なお、亀の井ホテルには熊八が自伝として書き始めたと思われる直筆の原稿や大正末期に建築しようとしたホテル建築の趣意書があり、再度その読解を試み、そこから彼の当時の町政に対する意見や、彼の考える別府の未来像などを読みとる作業が必要だと考えている。

いずれにせよ表一に掲げた文献のほとんどが同じエピソードを扱っており、あるいは作品によつては脚色され、どこまでが真実でどこからがフィクションなのか分からなくなることも多い。筆者はもう少し時間をかけ、熊八ならびに同時代を生きたその取り巻き達や、女性、日名子太郎をはじめとした為政者、別府の観光振興に尽力したその他多くの人物のことを明らかにし、大正期の別府振興の全容を明らかにしていきたいと考えている。

ここで、まずは熊八の人物像と筆者なりの評価を試みておこうと思う。その人物評を最も簡潔に言い得ているのが、兼子鎮雄の記録であろう。兼子は次のように綴っている¹⁸⁾。

人物評

彼を偲ぶ彼の人物評をあげて見ると

常に先を見る 先端を行く 進歩的な人

勤労を愛し 勤労を鼓吹する人

計画の人 計画を必ず実行する人

意志の強い人 情にあつい人

失敗に屈せぬ人 立志伝中の人

別府を愛し 別府の為に終始尽した人

内外に新智を求め各地の長を採る人

宣伝する人 宣伝上手な人

常に希望をもち 希望に邁進する人

博覧強記の人 天真らんまんの人

お客を大事にする人 サービスのいき届く人

人に好感を与える人 人をよく調和させる人

これをはじめとし表一に掲げた文献を読んだところで、筆者は、熊八は次の七つの力が具わった人物であったと見ている。それは、「A. 卓越した情報力」「B. 時代を見抜く洞察力」「C. 奇抜な独創力」「D. 説得性に富む企画力」「E. 遅しい実行力」「F. 幅広い人的ネットワーク力」「G. 人を惹きつける愛嬌力」である。以下に、AからGまでについて記述する。

A. 卓越した情報力

大阪に出て、株の相場師になったことは周知の事実であるが、相場の世界は通常の情報力では、凌いでいけない世界である。ましてや「油屋將軍」とまで言われた熊八である。最後は失敗したとはいえ、その力は群を抜いていたと思われる。失意の中での渡米ということであったが、アメリカでの見聞は、後の旅館・ホテル業にみごとに花開いていると言える。

ところで彼は大阪時事新聞の経済記者を経て独立し、相場師になったと伝えられているが、それではなぜ記者になられたのか、なぜ株相場をやるようになったのか、またなぜアメリカに渡ったのか、彼の地でのどのような思いで、どのような生活をしていたのかなどは、全体的に確かな記録が乏しく、謎めいている。大阪や東京にも屋敷があったというから、その時代の事、渡米中の熊八についても研究課題である。なお、外山の教示によれば、「アメリカには、『頭の洗習のため』と後述している」とのことで、また東京に相当の屋敷を持っていたことを現地調査と関連資料（地図）で確認している外山は、「熊八は、決して無一文で渡米した訳ではない。東京に熊八御殿なる屋敷があり、それを売りさばき、資金を持って行ったはずだ。」と言う。

B. 時代を見抜く洞察力

物事をやるには豊富な情報を得ることだけでは、不十分である。いわゆる「データ」や「インフォメーション」といった情報に対し、「インテリジェンス」、すなわちものごとの意味を解く読解力や本質を見抜く直感力・洞察力といったものが求められるが、熊八には、それが十分に具わっていたと思われる。「勘がいい男」とも言えるが、それは、持つて生まれた才能とも言えれば、やはり大阪での相場師の経験やアメリカでの苦労の影響が大きかったと考える。

あるいは、青少年期に培われたものではないかと考え、宇和島市での調査も実施したが、確かな手がかりは得られなかった。



油屋熊八が町会議員として活躍した頃の町會議事録綴
(宇和島市議會所蔵)

C. 奇抜な独創力

熊八が手がけた事業は、別府での個性的な「ホテル」の経営、地獄循環道路の整備と地獄遊覧バスの運行、女性バスガイドの登用、「全国大掌大会」の開催、「別府宣伝協会」や「オトギ倶楽部」の発足、富士山への標柱設置活動、有名な「山は富士、海は瀬戸内、湯は別府」というキャッチコピーの創出、海外宣伝、『日本新八景』選定への応募活動、宝塚少女歌劇団の誘致、九州横断道路の構想など、奇抜なアイディア事業で溢れかえっている。いったいなぜこのように次々とアイディアが湧くのか不思議であり、これも一つの謎、研究テーマになるが、こうした独創力は、今日でもあらゆる企業や地域に求められるということから言っても、大正期においては、別府の熊八は群を抜いている。そしてそのことが、別府の情報発信、イメージ形成上、他の温泉観光地に対する比較優位性の形成に貢献した点が、熊八の最大の功績と言ってよいであろう。

D. 説得性に富む企画力

アイディアだけで止まってはならない。それを企画し、多くは個人一人で実施することはできないのであるから、賛同者・協力者を得るために企画としてまとめなければならぬ。この点でも、熊八は他に勝っていたといえよう。その際、A、

Bなどの力がよく發揮されており、ホテル構想などを見ると、直ぐには実現しなかったとはいえ、プランにはたぶんアマリカでの滞在経験が生きているように思え、また協力者を得ることに成功しており、説得性に富む企画をまとめる力を読み取ることができる。

E. 逞しい実行力

熊八の凄さの一つが、企画発案したことを実行に移す強さにある。その逞しさもいったいどこから来るのかも謎の一つである。実行力というのは、思った事をただ強引に進めればよいというものではない。なぜ、そのことが必要なのか、内容に夢やロマンを感じさせられるか、事業のコンセプトや場合によつては緻密な事業計画、財源的裏付け、将来の発展性などが感じられるような表現が求められてくる。C. で掲げたような熊八の取組は、いずれもそのような配慮が行き届いた上で、実行されているのである。

あるいは、別府にも宝塚歌劇団のようなものをつくるという構想では、残念ながら失敗するが、それなら本物を誘致しようとする阪急の小林社長を説得するなど、夢の実現に向けていい意味での執着や粘り強さ、事業手法を臨機応変に変えていくなどが随所に見られる。

F. 幅広い人的ネットワーク力

驚くのは、その人脈・人的ネットワークの広さと深さである。熊八の周りには、当時の経済界、文学界のトップクラスの人材が様々な形でつながっている。今、そのうちの一部を挙げれば、経済人では、小林一三阪急社長、森永製菓創始者の森永太一郎、後の宝酒造の礎を築いた大宮庫吉、文化人では、口演童話家の久留島武彦、童話作家の巖谷小波、詩人の野口雨情、作曲家の中山晋平などの名が挙がる。こうした人的ネットワークの広がり、対象とした人材群、それらをどのようにして作っていったのかなどの全体像を解明するのも、興味深い研究テーマである。

G. 人を惹きつける愛嬌力

非常にパワフルで、好奇心旺盛、事業欲が強い強靱な人間かと思えば、酒はいっさい飲まない、タバコは吸わないという。アメリカではキリスト教の洗礼を受け、清貧な質素な生きざまを感じさせる。時に喧嘩もどきのぶつかり合いも辞さないかと思えば、「旅人をねんごろに迎えよ」と、観光サードス面では、徹底したホスピタリティを発揮する。全国大塚大会に至っては、自らも参加し全国二十位ということで喜び、以来、色紙に手形を押しまくったという。幾つになっても「万

年青年」と書くから、本当にいつも張り切り、いきいきしていたようである。筆者は、そうした人間的面白さ・魅力を「愛嬌力」と表現してみた。この「愛嬌力」こそ、老若男女、誰をも惹き付ける魅力だったのではないかと考えている。

六 熊八を取り巻いた人々

次に、熊八を取り巻く人物たちについてグルーピングして考えてみる。まず第一にあげるべきは親族である。妻ユキは、宇和島藩主伊達宗城側用人戸田義成の娘で、熊八とは再婚であったことは分かっている。しかしこれといった資料は無く、多くが謎である。熊八の女性関係はかなりなもので、このあたりは、これまで発表された著作でも取り上げられているものの、真偽のほどは分からない。多くはフィクションと見るべきであろう。熊八と昵懇の仲だった女性として、村上本で「亀井タマエ」と言う名の女性が登場するが、これは「亀井アイ」という実在の女性がモデルになっていると思われる。今回のヒアリング調査で何人かに「亀井タマエ、または亀井アイなる人物をご存じですか」と尋ねてみたが、古川功（元亀の井ホテル社長）や油屋正一（熊八の実子、長男）らの証言では、前者については実在者であったとの確認は取れな

かつたが、後者の「亀井アイ」が実在したことは明らかである。外山によれば、「昭和十一年七月二十八日付け（大分新聞）に『亀井アイ、突然満州新京から一時帰国・・・』との記事がある」と言う。また亀井アイは、熊八没後十五年目の昭和二五年に開かれた「油屋熊八翁をしのぶ座談会」にも出席しており、また生前の彼女とは熊八の長男である正一が何度も出会っており、「とてもしつかりした人格者でした。」との証言を得ている。そして、彼女こそは、岩藤本の中で言う「料亭一つ家」の女将で、熊八に旅館経営を教えた重要な人物だったのである。

なお「亀の井旅館」の（亀の井）は、志多摩本では、「油屋ユキは旅館の名に迷ったが、熊八が大阪の邸宅にいるとき好きだった鶴亀の置物、庭には亀の甲らをもじった井形の泉水をつくっていたことから、熊八が気に入ることを確信して亀の井旅館（現亀の井ホテルの前身）と名付けた。」⁽⁷⁾とあるが、他の多くの文献では亀井アイの名から取ったという説が有力である。

恐らく、「亀井アイ」は相当の経済人であり、熊八にとってはビジネス上の先輩であり、また熊八の良き協力者、今風に言えばビジネスパートナーだったのではないかと思われる。

る。岩藤の作品は、この亀井アイに関する描写が実に細かく、かつ熊八との関係も実にリアルに描かれている。ちなみに岩藤は、「亀の井旅館」の（亀の井）は、亀井アイの名からきているとしている。男女関係の問題はさておくとして、熊八とのビジネス上の付き合いは深いものがあつたと思われる。いずれにせよ熊八研究には亀井アイの研究も欠かせず、今後の課題である。

熊八を取り巻く第二グループは熊八も含め「四天王」といわれた宇都宮則綱、梅田凡平、原北陽らである。いずれも熊八に負けず劣らぬ個性的な人物ばかりである。この四人の活躍が、後の多くの文献に登場するが、しかし、それぞれの人物研究が十分ななされているとは限らない。宇都宮は、自伝を残しているが、梅田については、略歴やいくらかの評伝がある程度で、本当のところ、よく分からない。原北陽に至っては、筆者の手元には資料らしいものは何も無い。「広島県出身で、今もゆかりの親族が写真店を営んでいる。」と外山は語ってくれたが、原北陽研究も課題として残る。

第三のグループが、熊八が興した「亀の井旅館」を発端とし、その後、ホテル、交通、観光関連で拡大していく亀の井グループを作りだしていく、草創期の関係者である。志多摩

本や村上本などには、当時のスタッフの名前が登場する。彼らは、まちづくりそのものということではなく、熊八の会社、事業そのものに寄与した人々であるが、これらの人々もそれなりに大事な役割を果たしたのであるが、その資料はやはり乏しい。これも今後の研究課題となる。

第四が、グループというより、熊八とご縁のあつた様々な地元内外の経済人や政治家、文化人らである。それなりに名の通つた人々なので、個々の人物像はある程度分かるが、それぞれがなぜ別府や熊八と関わるようになったかを整理することは、熊八の人物研究や別府振興の要因分析に関わつてくると思われるので、これも一つの研究テーマになりうる。

七 まとめ

別府は、湯量とその質において日本一であつたが、明治三十年代初頭までは、全国的に知られた観光地とは言えなかつた。しかし、我が国の産業革命が軌道に乗り、国土交通網整備が進むとともに、国民の移動が活発化し、「大正期の観光ブーム」が起こる。その時流に別府はタイミングよく乗り、当時の為政者や住民らの努力もあり、全国の他の地方に先がける形で、鉄道整備、港湾整備、都市計画（道路整備・

耕地整理）、上水道整備など、いわゆる都市的物的（ハード）整備を完了し、観光に十分対応しえる都市づくりが進んだことと同時に、積極的に別府宣伝活動というソフト事業を進めたことが、大きな飛躍の要因だったといえる。

そうして既に日名子太郎ら別府人らがハード、ソフト両面において別府の地域振興に着手し、軌道に乗り出した明治末年に、別府は空前のアイディアマンである油屋熊八を迎えるのである。卓越した情報力で時代の動きを敏感に感じ、時代を見抜く洞察力を持ち、奇抜な独創力、説得性に富む企画力、逞しい実行力、幅広い人的ネットワーク力、人を惹きつける愛嬌力といった、類い希な才能を持つ熊八は、偶然とはいえ、多くの同志を得、勢い付いていた別府について、さらなる観光宣伝を中心とした数々の事業に成功を収め、別府を世に売り出したのである。

冒頭で述べたとおり、我が国の近代化過程においては、国土開発や地域開発においてはハード整備が先行した点では、戦後日本の高度経済成長期とよく似ているとも言える。そして高度経済成長期後は、「ハードからソフトへ」「文化の時代」が標榜され、地域振興のソフト事業の充実が希求されたように、大正期には地域振興策も地域情報発信に重点が移つ

ていったと考えられ、それをいち早くものにしたのが別府であつたと筆者は評価する。ここにおいて大正期に「観光振興」をテーマに、別府はみごとに全国の先駆けとなるまちづくりのモデルを提示したのである。

その意味では、「油屋熊八が別府を創った」とも言えるが、「勢い付いていた別府が油屋熊八を創った」とも言えるのである。



油屋熊八の墓(宇和島市内「光國寺」内)

謝辞

本稿を執筆するにあたり、多くの方々にお世話になった。とくに三重野勝人氏、村上秀夫氏、岩藤みのる氏、古川功氏、外山健一氏、小野弘氏、油屋正一氏、梅田智行氏、衛藤健二氏、山口隆史氏、吉永秀生氏には、インタビューへの対応や資料

提供、助言などを賜った。また、大分県立図書館、別府市立図書館、別府市観光協会、宇和島市立図書館、宇和島市議会等には、資料検索でたいへんお世話になった。うかがった内容や資料を十分活かさきれていないこと、また本文中敬称は略させていただいたことなどをお許し願いたい。これらの人々すべてに対し、紙面を借りて感謝申しあげる次第である。

注・参考文献

- 1) 明治二年に天皇が東遷すると、まちは衰退し幕末嘉永三年(二八五〇)に二九万人だった京都市の人口も、明治十年(二八七七)には、二三万人に減った。歴代の知事は、各種の産業振興策を打ち出すが、決定打にはならなかった。
- 2) 琵琶湖疏水は、明治一八年から二三年までの五年間をかけて完成した、琵琶湖の水を京都市に引き、工業・農業振興、水運等の七大目的で建設された多目的運河で、建設費は約一二五万円である。これにより水力発電をおこし、もって船を上下させるインクライン整備や工業振興、市電の運行がなされ、京都市は一気に活性化されたという。明治中期の地域開発の成功例と言われるものである。
- 3) 大正期に「観光ブーム」があつたことを裏付ける事象の一つとして、昭和二年の「日本新八景」の選定や、二〇〇八

年の八月から十月にかけて東京にある「江戸東京博物館」の展覧会『『美しき日本―大正昭和の旅』展』での展示物からうかがうことができる。同博物館のHPには、「大正元年にジャパン・ツーリスト・ビューローが設立され、「美しい」日本をセールスポイントに海外へ向けた積極的な誘致が行われ、外国人旅行者も日本の観光地を訪れるようになりました。」とある。

<http://www.edo-tokyo-museum.or.jp/kikaku/page/2005/0830/press/press.pdf#search=>「大正期の観光ブーム」

- 4) 浦達雄「温泉地の輪廻からみた別府八湯と今後の課題」『別府史談第十九号』別府史談会、二〇〇六年、三月、十二頁。
- 5) 志多摩一夫、『別府開発の偉人 油屋熊八』一九七九年、二六―二七頁、及び『別府市誌』別府市、一九七三年、六〇六頁。
- 6) 『別府市誌第一巻』別府市、二〇〇五年、一二二頁。
- 7) 『別府市誌』別府市、一九七三年、六〇五頁。
- 8) 『別府市誌第一巻』別府市、二〇〇五年、一二二頁。
- 9) 『別府市誌第二巻』別府市、二〇〇五年、一六二頁。
- 10) 前掲書、一六三頁。

11) 前掲の浦論文、十二頁。

12) (社) 土木学会『土木技術の発展と社会資本に関する研究』総合研究開発機構、一九八五年七月、五五七―五五九頁。

13) 『別府市誌第一巻』別府市、二〇〇五年、一二二頁。

14) 三重野勝人「油屋熊八翁の実像を探る」『別府史談第十八号』、別府史談会、二〇〇四年、三八頁。

15) 『別府市誌第一巻』別府市、二〇〇五年、一二六―一二七頁。

16) 前掲書、一二七頁。

17) 前掲書、一二六頁。

18) 兼子鎮雄「観光別府の先覚者 油屋熊八」、別府市立図書館蔵、一九五二年、十八頁。

織田 直文(おだ・なおふみ)

一九五二年金沢市生れ。福井大学工学部建設工学科卒。建築や都市計画の民間会社、財団法人滋賀総合研究所、滋賀文化短期大学を経て、現在京都橘大学現代ビジネス学部教授。専門はまちづくり政策、地域計画論。

主要著書『琵琶湖疏水』かもがわ出版(一九九五年)、『文化開発の可能性』編著・晃洋書房(二〇〇四年)、『臨地まちづくり学』サンライズ出版(二〇〇五年)。

表一 油屋熊八および別府関連文獻一覧

記号	発刊年	著者等	タイトル	発刊元等	内容解説、所蔵先等
A	M23-25		宇和島町議会議事録	宇和島町議会	和紙に墨で書かれた、明治期市町村制開始の頃の議事録であるが、破損が著しく、解読は難しい。また内容は究めて簡便な記録で、熊八の個別議員の発言や質疑記録は無い模様。史料の修復後、解読する必要がある。宇和島市議会事務局蔵。
B	M42	菊池蘭芳	別府温泉繁昌記	大阪毎日新聞に連載の後、如山堂書店にて刊行。	当時、大阪毎日新聞記者であった著者が、別府の賑わいを書いたもの。大分県立図書館蔵。
C			梅田凡平関連史料		梅田凡平関連の当時の写真集は、梅田家から別府市立図書館に寄贈にて、同図書館蔵。本人並びに妻・うめの自筆履歴書等は、梅田家が所蔵。
D			油屋熊八略歴		熊八の略歴と縁者からの手紙が保存されている。大分県立図書館蔵。
E	S17	堀博忠	別府三百年史(前)	別府市郷土史研究会	大分県立図書館蔵。
F	S25		油屋熊八翁をしのぶ座談会記録	「二豊の文化」S25.9月号	昭和25年7月27日、亀の井ホールにおいて「別府国際観光温泉文化都市建設法」制定を記念して行われた座談会。亀井アイを主役熊八ゆかりの23名が参加。文献(三重野)に紹介有り。
G	S27	兼子鎮雄	観光別府の先覚者 油屋熊八翁		孔版(ガリ版)原稿。熊八の経歴、年表など、かなり詳述されている。兼子氏は戦前の別府中学の校長を務め、地元では有名な人物。ただし、熊八との関係は不明。別府市立図書館蔵。
H	T3		別府町誌	別府町	別府町時代の町誌。
I	S38 48.60 H15。		別府市誌(史)	別府市	別府市新後の市誌。昭和3年から平成15年までに5回、刊行。大正3年のものを含めると町・市誌は計6回、発行。
J	S8.12-14		別府(雑誌)	別府社	昭和初期の時代の雑誌(月刊誌)で、当時の温泉、お店の紹介、読者からの原稿等で構成。大分県立図書館蔵。
K	S32	渡辺徹夫	別府の歴史	大分県地方史研究会	大学教授などの専門家がテーマ毎に別府の歴史について書いた専門書。大分県立図書館蔵。
L	S34	吉永カメラ (吉永秀生)	泉都別府の懐かしき映像「湯の町別府」	吉永カメラ	半世紀前の別府の状況を、8ミリカメラで映像記録編集をした貴重な史料である。S34年の日本アマチュア小型映画連盟主催の1959年度コンテスト入賞作品をDV化したもの、現在の吉永カメラ店で入手できる(有料)。
M	S40	宇都宮剛綱	回顧七十年	私家版	宇都宮剛綱の自伝である。
N	S41	細川光徳他	南予の群像	新愛媛	南伊予地域の歴史的な人物を紹介した書籍の中に、油屋熊八の紹介有り。宇和島市立図書館蔵。
O	S41	是永勉	別府今昔	大分合同新聞社	明治、大正、昭和の姿を描いた著作。別府市立図書館蔵。
P	S43	堀藤吉郎・志多摩一夫	目で見える別府百年	別府市郷土文化史研究会	郷土史家の堀藤吉郎が保存していた明治以降の貴重な写真を基に、さらに梅田凡平氏の息子の平八をはじめとする10名の方々からも数枚ずつの写真提供を受け、編集したもの。別府市立図書館蔵。
Q	S45	兼子俊一	油屋熊八(『大分県の産業先覚者』所収)	大分県	熊八の経歴の紹介。別府市立図書館蔵。
R	S52	志多摩一夫	別府今昔郷土記	別府市郷土文化史研究会	明治から昭和初期までの豊富な写真に、様々な歴史書や市史、「別府温泉繁昌記」などの文献を参考に別府の歴史をまとめたもの。大分県立図書館蔵。
S	S54	志多摩一夫	別府開発の偉人 油屋熊八伝	別府市観光協会	大分県立図書館蔵、別府市立図書館蔵。
T	S55	安部蔵	ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和・別府	国書刊行会	明治から今日までの別府の写真が豊富に収録されている。大分県立図書館蔵。
U	S59	村上秀夫	アイデアに生きる小説油屋熊八	別府市観光協会	別府市立図書館蔵。宇和島市立図書館蔵。
V	S59	佐賀忠男	湯けむり太平記・油屋熊八物語	西日本新聞社	西日本新聞社蔵。
W	S62		大分県史 近代篇 Ⅲ	大分県	別府市立図書館蔵。
X	H4		「BAHAN」No.10「油屋熊八と別府」	極東印刷紙工機	雑誌「BAHAN」(全24号)のうちの一つで、油屋熊八と別府を特集したもので、写真、図、記事ともに良く編集されており、熊八の功績や当時の別府の様子がよく分る。
Y	H10	村上秀夫	アイデアに生きる小説 油屋熊八 パート2	別府市観光協会	別府市立図書館蔵。宇和島市立図書館蔵。別府市役所観光まちづくり課で入手可(有料)。
Z		小野弘	「懐かしの別府ものがたり」	今日新聞社	今日新聞社蔵。
a			別府風土記		新聞の連載記事、100回ほど続く。ただし、新聞社名は不明。
b	H11	岩藤みのる	甕れ!!熊八たち	岩藤 みのる	緻密な取材と豊富な史料を基に、熊八の宇和島時代から大阪時代、別府時代の全人生を、その切り替わりの活劇も含めて綴った渾身の作品である。別府市立図書館蔵。
c	H13	三好昌文	幕末期宇和島藩の動向	三好昌文	幕末期宇和島藩の事情を学術的に論究した書。伊達博物館で入手可(有料)。
d	H14		グラフ「地獄のある都市」	別府市観光協会	別府市観光協会の設立50周年を記念して制作されたもの。貴重な写真の挿入とともに分かり易く解説されたパンフレットの冊子。入手可(有料)。
e	H14	古川功	「油屋熊八」別府温泉の将来を描いた男	松竹編舞部 新編演舞場 宣伝部「パンフレット」	平成14年2月に熊八をモデルにした芝居が東京は新編演舞場大阪は3月に大阪松竹座で上演されることになり、そのプログラムに亀の井ホール社長の歓迎の挨拶文をということで書いたものである。
f	H14	堀田穰	油屋熊八伝説を疑う(『人間文化研究第9号』所収)	京都学園大学	当時全国的な動きであったお伽倶楽部活動の瀬戸内海版(瀬戸内海コトモ連盟)が活発化し、別府が瀬戸内海の拠点化したこと、また「子ども」が新たな観光のコンセプト化したことと述べ、別府お伽倶楽部の功績は、熊八にあるのではないと述べている。
g	H15	堀田穰	油屋熊八伝説の生成(『人間文化研究第10号』所収)	京都学園大学	『日本新八景』の選定における熊八の活躍、さらにはお伽倶楽部での活躍に触れているが、後者の部分は専ら梅田凡平の活躍が主であり、梅田の関西等での人脈が別府観光の振興に貢献したとしている論文。
h	H16	藤谷恵	別府温泉を世界に知らしめた男・油屋熊八(『歴史街道』2004.11号)	PHP研究所	油屋熊八の紹介記事。
i	H16	三重野勝人	油屋熊八の実像を探る(『別府史談』第18号所収)	別府史談会	熊八の実像を明らかにすべく、様々な資(史)料を基に、丁寧な分析を試みた論文。
j	H17	宇和島市誌編纂委員会	宇和島市誌(上・下巻)	宇和島市	熊八の出身地である宇和島の歴史を知る基本文獻。
k	H18	堀田穰	油屋熊八・梅田凡平・お伽船(『別府史談』第19号所収)	別府史談会	別府でのお伽倶楽部での油屋熊八、梅田凡平の活動評価を行っている論文。
l	H18		別府市観光読本 其之巻 2006	別府市観光協会	別府の百年を振り返り、日名子太郎や油屋熊八らの功績を紹介するとともに、「別府八通」毎の紹介ものづくりや食文化、まちづくり等の紹介もあり、観光ガイドブックとして活用できるもの。市の観光まちづくり課や観光協会等で入手可(有料)。
m	H18	佐和みずえ	別府 華ホテル 観光王と娘の夢	石風社	熊八をモデルとした主人公が娘とアメリカでホテル業を学び、帰国後、別府にて親子でホテル業を成功させるという小説。
n	H19	宇和島市教育委員会文化課	宇和島市名譽市民 大宮庫吉 小伝	宇和島市立歴史資料館	歴史資料館職員山口隆史らが、宝酒造を育てた郷土出身の大宮庫吉氏の伝記をまとめたものであるが、氏の随筆から、氏の生家と熊八の生家が向かい合っていたことを突き止め、熊八の生家を推定。

筆者による調査に加え、三重野勝人「油屋熊八の実像を探る」(『別府史談』第18号所収)、「BAHAN」No.10「油屋熊八と別府」を参考に作成した。2008年12月20日現在。当表で漏れている資料や文獻があれば、筆者までご一報いただければ幸いです。TEL/FAX 075-575-1820 メール:oda@tachibana-u.ac.jp